登場人物表

百々海　葉瑠（１７）　主人公。高校二年生。
水越　拓真（１７）　葉瑠の幼馴染。
百々海　康一（４７）　葉瑠の父親。
百々海　真由美（４１）　葉瑠の母親。

安芸　宗介（３０）　康一の恋人。
新名　樹（３６）　真由美の恋人。

帯刀　風花（１７）　葉瑠のクラスメイト。
中名生　翔（１７）　葉瑠のクラスメイト。

虹　靖司（１７）　葉瑠のクラスメイト。
温井　旭（１７）　葉瑠のクラスメイト。

○東京都内の新興住宅街（朝）

穏やかな朝日。

紅葉する街路樹。

○百々海家・外観（朝）

門柱に『百々海』の表札。

○百々海家・ＬＤＫ（朝）

リビング。

テレビから流れる、情報番組の声。

百々海康一（４７）の手が、自身の首元にネクタイを締める。

そこへ、生卵を打ちつける音。

キッチン。

百々海真由美（４１）の手が、生卵をフライパンに割り入れる。

フライパンにはベーコンと卵が三人分。

ダイニング。

テーブルは四人掛け。

キッチンカウンターには家族写真。

康一、やってきて腰掛け、新聞を開く。

真由美、やってきて料理を置く。

引き結ばれた康一の唇。
引き結ばれた真由美の唇。
○同・二階・葉瑠の部屋（朝）
カーテンが閉まっており室内は薄暗い。
本棚の本は勉強関連のみ。
勉強机にはノートと問題集が平置き。
古いデスクマットには、模擬試験の結果が挟んである。
第一志望は北道大学経済学部前期。
結果は余裕のＡ判定。
そこへ、携帯のアラーム音（バイブ音）。
それはベッドの枕元で鳴っている。
寝ていた百々海葉瑠（１７）、アラームを止め、ゆっくりと身体を起こす。
そして冷めた表情でベッドを下りる。
○同・ＬＤＫ（朝）
カウンターには二人分の弁当の手提げ。
ダイニングテーブルには三人分の朝食。
コーヒー片手に新聞を読む康一。
その斜向かいでテレビを眺める真由美。

階段を下りてくる足音。

康一、慌てて新聞をたたむ。

真由美、居住まいを正し、笑顔を作る。

制服姿の葉瑠が入ってくる。

葉瑠「おはようございます」

康一「ああ」

真由美「（康一の語末に被せて）おはよう、葉瑠。今朝は食べれる？　飲み物は？　牛乳とオレンジジュースと、コーヒーも――」

真由美、言いながらキッチンへ入るが、

葉瑠「いえ、ごめんなさい。食欲が……」

葉瑠、カウンターの上の弁当を取り、

葉瑠「いってきます」

康一「ああ」

真由美「（カウンター越しに）待って葉瑠！　今日の晩ご飯、何食べたい？」

葉瑠「（振り返って微笑み）何でもいいです。母さんと……父さんがよければ、それで。じゃあ……いってきます」

真由美「いってらっしゃい。気をつけてね」

ＬＤＫを出ていく葉瑠。
康一、再び新聞を開き、読みながら朝食を食べ始める。
キッチン。
無表情に立ち尽くす真由美。
テレビの声「続いて星座占いです。九月二十九日金曜日、今日の運勢は？」
真由美、カレンダーに目を遣る。
二〇一七年九月のカレンダー。
二十九日に赤丸がついており、『樹18:00』と書き添えてある。
ダイニング。
康一のバッグから携帯の通知バイブが。
康一、新聞を閉じ、携帯を手にする。
携帯画面にメッセージ通知が出ている。
差出人は『アキ』、メッセージは『おはようございます。ついに今日ですね』。
顔を上げてキッチンの方を見る康一。
真由美が康一を見ており、無表情な互いの視線がぶつかる。

○百々海家前（朝）

『水越』の表札のある門柱。

その横に立つ水越拓真（17）。

水越家は百々海家の隣家である。

百々海家の門から出てくる葉瑠。

拓真「ハルおはよー」

葉瑠「おはよう、タク」

○住宅街（朝）

横並びで歩く葉瑠と拓真。

拓真「なぁハル、今日のオレさ、いつもと違くない？」

葉瑠「ん、何が？」

拓真「ほら、たとえばさぁ、このへん（頭）とかぁ？」

葉瑠「あぁ、なんかつけてる？」

拓真「そ！　ワックス。『男のモテ度は、朝決まる』って今CMやってる」

葉瑠「へー」

拓真「……うっす！　リアクションうっす！」

葉瑠「だって別に興味無いし」

拓真「待ってみはるちゃん、それワックスに？
それともオレに？」
葉瑠「どうだろ。ていうかみはるちゃんはやめて。学校で真似して呼ぶ人が増えるから」
拓真「え、今さらじゃん。幼稚園のときから呼ばれてただろ？　『とど、みはる』でみはるちゃん！」
葉瑠「『とどみ、はる』だって。もうっ、あんまり言うならおばさんにいいつけるからね……タっくん」
拓真「ぐあっ、大ダメージ。タっくんは痛い。母ちゃんしか呼ばないやつ」
葉瑠、くすくす笑い、カロリーバーを取り出して食べ始める。
拓真「……朝メシは？　食ってねぇの？」
葉瑠「……毎朝同じこと聞かないで。食欲湧かないんだ、『仮面夫婦』と一緒だと」
拓真「あー……ごめん」
葉瑠「うんざりするよ、あんな嘘くさい食卓」
拓真「なんか、あー……わかるけどさぁ……

腹ん中どんなでも、少しはあいそ良くしとけよ？　学費出してもらうんだろ？」

葉瑠「もらわない。国立なら奨学金とバイトで行ける」

拓真「とか言ってさぁ……つーかお前ほんとに道大行くの？　やめとけよ。家から出たくて北海道とか、そんなんぜってーやべぇって。都内で一人暮らしすりゃいいじゃん」

葉瑠「簡単に行き来できない距離がいいんだ」

葉瑠、携帯を出して画面をいじる。

拓真「……なぁ、一緒に早生葉行こうぜぇ？　でさぁ、バンド組もうよぉ」

葉瑠「早生葉行くなら、タクは英語を強化しなきゃね。中間考査ももうすぐだし」

葉瑠、完全ワイヤレスイヤホンの片方を拓真の耳に突っ込む。

もう片方は自分の耳へ。

イヤホンからは英単語が流れている。

拓真「へいへい、しつこいってか。はぁーあ」

葉瑠「……ごめん。誘ってくれるのは嬉しい

んだよ？　でも……」

拓真「……お前、それ貸して」

葉瑠「え？」

拓真、葉瑠の耳からイヤホンを取り、自分の耳にはめる。

葉瑠「なに、ちょっと」

拓真「ハルはこっち」

拓真、自分のイヤホンを取り出し、葉瑠の両耳へ。

拓真のイヤホンからは、洋楽ロックが。

にんまりと笑う拓真。

葉瑠、複雑な表情をしつつも、大人しく洋楽ロックに耳を傾ける。

○新宿駅ホーム（朝）

電車がホームに着く。

人波に混じりホームへ出る葉瑠と拓真。

葉瑠M「仮面を被って生きている」

○都内のとあるオフィス街（朝）

会社への道を歩く康一。

葉瑠M「父さんも」

○百々海家・キッチン（朝）

洗い物をする真由美。

葉瑠M「母さんも」

○新宿駅構内（朝）

人混みを歩く葉瑠。

葉瑠M「僕も。もう随分と前から、僕らは」

人混みを歩く新名樹（３６）。

葉瑠M「何かを隠して」

人混みを歩く安芸宗介（３０）。

葉瑠M「何かを繕おうと」

葉瑠と樹と安芸、三者の進路が、構内の一点で交わろうとしている。

葉瑠M「必死になっている」

不意にイヤホンの音楽が止まる。

葉瑠、立ち止まる。

葉瑠M「仮面を外して向き合える相手を」

葉瑠、背後を振り返る。

葉瑠M「ずっとずっと、求め続けている」

葉瑠の傍を、樹と安芸が通過していく。

人混みの奥から拓真が姿を見せる。

葉瑠を見つけ、駆け寄ってくる拓真。

拓真「ああいた、よかった」

葉瑠「ごめん、タク。ぼうっとしてた」

葉瑠、イヤホンを外し拓真に返す。

拓真、怪訝な顔で受け取る。

二人は乗り換えのホームへ向かう。

○都立西南高校・外観（朝）

○同・三階・2年A組の前の廊下（朝）

拓真と別れ、教室へ入る葉瑠。

○同・2年A組教室内（朝）

室内は賑やか。

窓際の席に座る葉瑠。

窓の外は、眩しいほどの秋晴れの空。

葉瑠、顔をしかめ、カーテンを引く。

○同・図書室（夕）

閉じたカーテンを開ける教師。

窓から見える、夕焼け空。

教師「（部屋中へ）最終下校、守れよー」

自習の手を止める葉瑠。

通知バイブが鳴り、葉瑠、携帯を見る。

真由美の声「今夜はハヤシライスです」
　葉瑠、返信をせずに携帯を仕舞う。
葉瑠M「嘘くさい会話と、味のしない料理」
○百々海家・外観（夜）
葉瑠M「一体なんの意味がある？」
○同・ＬＤＫ（夜）
　葉瑠、ドアを開け、
葉瑠「ただいま」
　突如浴びせられる、二発のクラッカー。
葉瑠「うわっ」
真由美「おかえり葉瑠」
樹「おかえりぃ」
康一「おかえり」
安芸「おかえりなさい」
　康一と安芸、真由美と樹がそれぞれ寄り添って立っている。
葉瑠Ｎ「『意味なんて、無い」
　安芸の腰に回されている康一の手。
葉瑠Ｎ「つまらなくて」
　樹の腕に絡められている真由美の手。

葉瑠Ｎ「息苦しい」

誕生会のように飾りつけられた室内。

葉瑠Ｎ「いつもの夕食が始まる『」

ダイニングには五人分のご馳走。

葉瑠Ｎ「そう思っていたのに」

笑顔で葉瑠を見つめる四人。

真由美「葉瑠。彼女は新名樹。私と彼女、付き合ってるの」

康一「葉瑠。こっちは安芸宗介。俺たちも、そういう関係だ」

真由美「母さん、実はレズビアンです」

康一「父さんも実はゲイなんだ」

真由美「樹が好きなの」

康一「宗介を傍に置きたい」

真由美「一緒に暮らしてもいい？　ここで」

康一「家族にならないか、五人で」

真由美と康一、同時に、

真由美「お願い、葉瑠」

康一「頼む、葉瑠」

狼狽える葉瑠。

葉瑠「え……待っ、あの……なに……え……？」

と、後ずさりつつ『新家族誕生会』との文字が壁に貼られているのに気づく。

葉瑠「新、家族……？　……んじゃない……冗談じゃないっ！」

葉瑠、踵を返して飛び出していく。

立ち尽くす四人。

玄関の扉の閉まる音。

○水越家・外観（夜）

○同・二階・拓真の部屋（夜）

壁にはミュージシャンのポスター。

ヘッドホンで洋楽ロックを聴く拓真。

一階でペットのトイプードルが吠えているが、気づいていない。

曲が終わり、ようやく気づく。

拓真「ん？」

○同・庭（夜）

玄関から門へ歩いていく拓真。

拓真「ごめんごめん、ヘッドホンしてて」

門の向こうに葉瑠が俯いて立っている。

拓真「（怪訝そうに）ハル？」

○同・二階・拓真の部屋（夜）

ドアの方へ向かって投げられたボール。

それをくわえて戻ってくる犬。

ベッド脇に敷かれた布団の上に、スウェット姿の葉瑠が座っている。

葉瑠、拓真の言葉を思い出している。

拓真の声「事情はわかったからさ……今日は泊まってけよ」

犬、葉瑠の傍でボールを放す。

葉瑠、またボールを投げる。

追いかけていく犬。

そこへちょうど、スウェット姿の拓真が入ってくる。

拓真「ハル、お前んち電話したら、おばさんが出た。明日には帰るって言っといたから」

葉瑠「ありがとう。迷惑かけてごめん」

拓真「ばか……寝るぞ」

壁に掛けられた二着の学生服。

部屋の電気が消える。

それぞれベッドと布団に入った二人。
犬は葉瑠の布団にいる。
葉瑠、なかなか寝つけない。
拓真「チョコ太の鼻息、うるさくねぇ？」
葉瑠「（笑って）全然？」
拓真「……なぁハル、オレさ、思うんだけど……ハルはもう少し、親と一緒にいたほうがいいよ」
葉瑠「なんで」
拓真、もぞもぞ動き、葉瑠の顔を覗く。
葉瑠「なに？」
拓真「寂しいって顔してるよ、お前。親のこと話すとき、いっつも」
葉瑠「うるさいなぁ」
葉瑠、布団を頭までかぶる。
葉瑠「ようやく腑に落ちたんだ。父さんも母さんももともと、お互いのことが好きじゃなかった。だからずっと、他人みたいな変な感じがしてて……。結婚したのはたぶん……僕が、なんかの間違いでできたからだ」

拓真「やめろよ。誰かがそう言ったのか？」

葉瑠、答えない。

拓真「勝手にそう思ってるなら被害妄想だぞ。ゲイとビアンのカップルが、間違いでできた子を高校生まで育てるか？　オレが当事者なら施設にでも預けてるよ。それか、生まれる前におろすか。……ずっと言わないようにしてきたけど、お前の話を聞く限り……おばさんもおじさんも、良い親であろうと努力してる」

葉瑠「わかってるよ……！　でも、それが僕は嫌だったんだ。見え透いた嘘が許せなかった。ひとつ嘘だと思ったら、何もかもがそう見えてきた」

拓真「ねぇハル……たぶんおばさんたちさ、お前のそういうのに気づいてるよ。だから打ち明けたんだよ。もう嘘つくのやめようって思ったんだ。だって、おばさんたちが嘘つき続ける限り、ハルもおばさんたちに、嘘つき続けるんだろ？　そんなの、誰も幸

せにならないじゃん」

葉瑠「（嘲笑）それで、いきなり恋人連れてきて、一緒に暮らそうって？」

拓真「一か月。試しに暮らしてみたら？　それで駄目なら、うちに来いよ。隣の部屋空いてるし、父ちゃんも母ちゃんもオレが説得する。てかあの二人、仕事でほとんど家にいないから大丈夫。高校の間はうちから通えよ。で、卒業したら道大行って、二度と帰ってこなきゃいい」

葉瑠、布団から顔を出し、

葉瑠「タク……」

葉瑠、起き上がって拓真を見、

葉瑠「タク。僕さ、父さんと母さんのこと、小さい頃は好きだったんだ。嘘になんて、気づけなかったから」

拓真「うん」

葉瑠「あの頃に戻りたい。それが無理なら、早く大人になりたい……」

拓真「……うん」

俯く葉瑠。
枕元で、携帯の通知バイブが二回。
そちらに顔を向ける葉瑠。
通知を見て、僅かに目を見開く。
葉瑠M「……どうしてだろうか」
○百々海家・ＬＤＫ（夜）
酒を飲みつつ携帯を見つめる康一。
葉瑠M「昔からずっと捨て去ることができなくて」
○同・二階・真由美の寝室（夜）
ベッドの中で携帯を見つめる真由美。
葉瑠M「いつまでもいつまでも、靄のように留まり続ける」
○水越家・二階・拓真の部屋（夜）
ぼうっと携帯を見つめる葉瑠。
葉瑠M「どうしようもない胸の痛みが」
枕元に置かれた携帯の、画面。
康一と真由美からそれぞれ『おやすみ』とのメッセージ。
葉瑠M「今、一際強くなって」

葉瑠の頬に一筋の涙が伝う。

葉瑠M「強くなって……強くなって……」

○百々海家・外観（昼）

○同・ＬＤＫ（昼）

ダイニングの椅子から立ち上がる康一。

キッチンから出てくる真由美。

ドアの前に葉瑠が立っている。

葉瑠「ただいま」

康一「おかえり」

真由美「おかえり、葉瑠……」

葉瑠「昨日は勝手に外泊してごめんなさい。

……同居の件、受け入れます」

真由美、感極まって口元を覆う。

康一「葉瑠、いいのか。もっと怒ったって……

……殴ってくれたって構わないんだ」

葉瑠、首を横に振る。

葉瑠「それより、お腹が空きました」

湯気の出る焼うどん。

葉瑠M「僕は、期待することにした」

葉瑠の箸がうどんを掴み、口元へ。

葉瑠M「この食卓が、僕たち三人の関係が」
不安げに葉瑠を見つめる康一と真由美。
葉瑠「おいしい」
葉瑠、顔を上げて両親を見る。
葉瑠M「これで変わるかもしれない、と」
葉瑠「どうかしました……？」
康一と真由美、ハッとして食べ始める。
葉瑠「あの、二人はいつ越してくるんです？
改めてやりましょうか、新家族誕生会」
康一と真由美、顔を見合わせる。
微笑む葉瑠。
○百々海家・正面（昼）
T「六日後」
トラックとワゴンが停まる。
それぞれ腹に『便利屋アニキ』『何でも屋なでしこ』と書かれている。
トラックの助手席には安芸らしき姿。
ワゴンの最も上座の席には樹らしき姿。
玄関チャイムの音。
○同・玄関（昼）

玄関ドアを開ける真由美。
ドアの前にはそれぞれのスタッフが一人ずつ立っている。
○都立西南高校・外観（昼）
教師の声「じゃあ中間考査の結果を返すぞー」
○同・三階・2年A組教室内（昼）
教師、あ行の生徒から順に呼んでいく。
携帯の通知バイブが鳴り、葉瑠、教師の目を盗んで携帯を確認。
真由美の声「引っ越し作業は順調です」
葉瑠の手の中で、通知バイブ再び。
葉瑠「ん？」
携帯画面に『マユがあなたを「ハルと愉快……」に招待しました』。
教師「百々海……百々海？」
葉瑠「っ……はい」
慌てて席を立つ葉瑠。
○夕暮れの空
○百々海家・玄関（夕）
葉瑠「ただいまー……なにこれ」

とドアを開けるなり顔をしかめる葉瑠。
女物の靴で埋め尽くされた玄関。
廊下に山積みの靴の箱。
○同・ＬＤＫ（夕）
押し開かれたドア、つっかえて止まる。
隙間から中を覗く葉瑠。
樹「あっ、おかえりぃ」
と樹、強引にドアを引き開ける。
床には洋服やバッグが散乱している。
樹「真由美の部屋に入らなくってぇ」
真由美「おかえり葉瑠。ご飯、少し待ってね」
真由美、ゴミ袋を持って立っている。
真由美「樹、これは捨てていいやつ？」
樹「あん駄目よ、マユちゃん、そっちも駄目」
葉瑠、苦笑し、廊下へ戻ろうとする。
その時二階で、物が複数落ちる音と、
安芸の声「わあああ！」
動きを止めて上を見る三人。
○同・二階・康一の部屋（夕）
開いたドアから顔を覗かせる葉瑠。

葉瑠「あのー」

段ボール箱だらけの室内。

ダブルベッドの上には本が山積み。

安芸へと倒れ掛かる、巨大な本棚。

しかし安芸、振り向き、穏やかに、

安芸「あ、葉瑠くん、おかえりなさい」

葉瑠「いや大丈夫ですかっ？」

段ボールを避け、室内へ入る葉瑠。

○同・二階・葉瑠の部屋（夕）

葉瑠「はぁ」

と、ベッドに仰向けにダイブする葉瑠。

天井を見つめ、瞬きをする。

×　×　×

（フラッシュ）

樹「（半開きのドアの隙間から）おかえりぃ」

（フラッシュ）

安芸「（本棚を支えながら）おかえりなさい」

×　×　×

康一の部屋からまた物の落ちる音と、

安芸の声「あああっ！」

そして階下からは、

樹の声「捨てちゃ駄目ぇー！」

葉瑠、ふっと吹き出し、笑い出す。

階下で康一の帰ってきた音。

真由美の声「あっ、コウさん足元っ！」

康一の声「うおお！　うああ！」

康一が樹の靴らにつまずき転ぶ音。

葉瑠、耳を澄まし断続的に笑い続ける。

○住宅街（朝）

拓真の声「グループ名『ハルと愉快なマイノリティィ』」

駅へ向かう葉瑠と拓真。

拓真「マジ、センス（笑）考えたの誰？」

葉瑠「ニーナさん。新名樹、って女の人の方。あ、なんか来た。……アキさんだ」

葉瑠、携帯を出し、いじる。

拓真「誰だって？」

葉瑠「安芸宗介さん。えっと、『水筒、せっかく用意してくれたのに持ってくの忘れてごめんなさい』って、母さんへ。こんなの個

別に送ればいいのに」

笑う葉瑠を横目に見る拓真。

拓真「（独り言）なんだ、元気そうじゃん」

葉瑠「ん？」

拓真「なんでもねぇよ、なんでもねえ」

早歩きで前に出る拓真。

首を傾げる葉瑠。

○都立西南高校・三階・２年Ａ組教室内（昼）

男女の級長が前に立ち、学級活動中。

黒板には『西南祭について』と議題。

机の下でこっそり携帯を見ている葉瑠。

画面上を次々と流れていくメッセージ。

樹の声「【速報】今日のランチ」

洒落た店のパスタの画像。

真由美の声「味覚えて家でも作るね！」

康一の声「マユさんもいるのか」

安芸の声「デートですね。いいなぁ」

樹の声「デート兼営業ね。ここの店長、うちのバーの常連だから」

安芸の声「常連といえば、葉瑠くんもうちの

常連ですよ」

葉瑠「ん？」

男子級長「はい！　では決定しました」

ハッとして顔を上げる葉瑠。

男子級長「西南祭実行委員は、帯刀さんと百々海くんにお願いしたいと思います」

沸き起こる拍手。

状況がつかめない葉瑠。

黒板には、『立候補　帯刀』の文字と、男子全員の名が書かれたあみだくじ。

『百々海』と『当たり』を繋ぐ赤線。

最前列の帯刀風花（17）、後列の葉瑠を振り向き、にっこりと手を振る。

よくわからないまま振り返す葉瑠。

○同（昼）

放課後。

戸口へ現れた拓真、教室内を見回し、帰宅準備をする女子へ、

拓真「ねぇ、ハル知らない？　百々海葉瑠」

女子「百々海くんなら、風花と委員会だよ」

拓真「委員会？　あいつ入ってねーじゃん」
女子「普通のじゃなくて、西南祭実行委員会」
拓真「……ふーん。ハルが、立候補で？」
女子「まさか。男子はあみだ。百々海くんが立候補なんてする？　クラスでだってほとんど喋らないのに」
　傍にいた男子三人組、中名生翼（１７）、虹靖司（１７）温井旭（１７）、
中名生「それな！　マジつまんねぇよアイツ。話しかけてもあいそ笑いだし」
虹「なーんか壁を感じるんだよねー。近寄るなオーラ出てるっていうか」
温井「ま、学年主席って時点でオレら底辺とは違うよな」
拓真「そうか？　アイツ結構笑うし、冗談とかも言うじゃん。いや壁？　近寄るなオーラ？　ナイナイ。あと、Ａ組Ｂ組は底辺どころか特進クラスだろ？」
中名生「……ふーん、幼馴染はそう言うか」
　皮肉るようにニヤつく中名生ら三人。

拓真、腑に落ちない表情で、

拓真「じゃ、オレ帰るわ。（女子へ）ありがと」

と、踵を返す。

○同高校・別棟一階・第二理科室・前廊下（夕）

『第二理科室』のプレート。

司会生徒の声「では来週の委員会までに――」

○同・室内（夕）

座って話を聞く委員たち。

司会生徒の声「――各クラス、西南祭での出し物を決めてきてください。それではこれで、第一回西南祭実行委員会を終わります。

起立。ありがとうございました」

葉瑠、皆と共に、

葉瑠「ありがとうございました」

と言い、礼をする。

すぐにバッグを持ち、去ろうとするも、

風花「あ、待って、百々海くん」

と、向かいにいた風花に止められる。

○学校から駅までの間の大通り（夕）

立ち並ぶビルと、紅葉した街路樹。

風花の笑い声。
敷石の道を歩く葉瑠と風花。
風花「百々海くんて面白いね。ほんと意外」
葉瑠「（曖昧に笑って）そうかな」
風花「うん！　あ、ごめんね、気に障った？」
葉瑠「ううん、別に」
風花「そ、よかった。あ、そうそう、前から気になってたんだけど、B組の水越くんと百々海くんて、どーゆー関係？」
葉瑠「え、どういうって……幼馴染？」
風花「ああ！　なるほど。納得納得」
葉瑠「え？」
風花「いやあのね、百々海くん、クラスの子たちとはほとんど喋らないのに、どうして他クラの水越くんとは仲良いのかなぁって」
葉瑠「あぁ……」
風花「そっかぁ、幼馴染ね。小中も同じ学校？」
葉瑠「うん、まぁ……幼稚園からずっと同じ」
ちょうど書店の前に差し掛かる二人。
風花「へぇ、いいなぁ。じゃあもしかして、

大学も同じとこ行くの？」

立ち止まる葉瑠。

風花「（振り返り）百々海くん？」

葉瑠「ごめん。僕ちょっと、本見てこうかな」

風花「ならあたしもー―」

葉瑠「ううん。遅くなるから先帰って。じゃ」

書店の中へ消える葉瑠。

取り残された風花、やや寂しげ。

○過去屋書店・店内（夕）

受験参考書のコーナー。

憂い顔でふらふらとやってくる葉瑠。

風花の言葉が思い出される。

風花の声「大学も同じとこ行くの？」

ふと目につく、早生葉の参考書背表紙。

伸ばした手はしかし、平積みの新刊へ。

一冊取りつつ、そのポップが目に入る。

小さな疑問が湧く。

ポップには、学ランを着た女の子の絵。

葉瑠M「このキャラクター、どこかで……」

安芸の声「いらっしゃいませ、葉瑠くん」

葉瑠「（振り向き）あっ、アキさん！」

書店のエプロンをつけた安芸、微笑む。

○大通り（夜）

葉瑠の胸に抱えられた書店の紙袋。

葉瑠「あの、ありがとうございました。結局買ってもらっちゃって」

並んで歩く葉瑠と安芸。

安芸「いえ。上がりまで待っててもらったお礼です。それにその本、手に取って、ポップまで読んでくれてたのを見て、嬉しくて。受験用参考書は、僕の担当エリアなんです」

葉瑠「そうだ。あのポップのイラスト……どこかで見たような気がしたんです」

安芸「ああ。それなら僕のアイコンですかね？」

安芸、携帯を取り出す。

ちょうどその時、通知バイブが鳴る。

安芸「あ、ニーナさんからだ。個別に珍しい」

続いて、葉瑠の携帯からも通知バイブ。

携帯を取り出す葉瑠。

葉瑠「あ、僕にもニーナさんから。というか

これ、すごく怪しい匂いがするんですが」
安芸「同じくです」
横目にちらりと視線を交わす二人。
葉瑠と安芸「【緊急招集】」
樹の声「ずぇっ、たい来て！　日時は今日、今すぐ！　場所はっ――」
○百々海家最寄りのファミレス・外観（夜）
○同・店内（夜）
開かれるドアと、入店チャイムの音。
店員の声「お待ち合わせのお客さまでーす！」
ソファ席でパフェをつつく樹。
そこへやってくる安芸と葉瑠。
樹、二人を見上げ、満面の笑み。
○同（夜）
賑わう店内。
樹の声「っていう訳なのよぉ」
樹「だからお願い！　うちで働いて？」
と、拝む樹。
樹の正面に座った葉瑠と安芸、それぞれ食べかけの料理を前にフリーズ。

安芸「え、ちょっと待ってください。働くって、僕と葉瑠くんが、ニーナさんのバーで？」

樹「金曜と土曜だけでいいの。少しの間、辞めたバイトの子の代わりが見つかるまで」

安芸「いや、無理ですよ。ダブルワークは禁止されてますし、なによりー―」

樹「ね、葉瑠は？　夕方五時から夜九時までの四時間で、バイト代は時給一五〇〇出すわよ。もちろん交通費も支給」

葉瑠「一五〇〇……四時間で一日六〇〇〇円」

安芸「（葉瑠へ耳打ち）駄目ですよ。絶対駄目。ニーナさんのお店、ビアンバーなんです」

樹「アキ、余計なこと吹き込まない！　別に接客はさせないわよ。違法だし、お客の子だって男は苦手って子もいるし。だからやってもらいたいのは裏方。要は料理と雑用」

安芸「そうはいっても葉瑠くんを働かせるなんてコウさんとマユさんが許さないですよ」

両親の名を聞き、ふと何かを思う葉瑠。

樹「だから内緒で呼び出してんじゃない。切

羽詰ってんの。他のバイトの子にも当たってみたけど、金曜と土曜はどうしても駄目で。今日は木曜でしょう？　今二人に無理って言われたら、明日と明後日は臨時休業になっちゃうわ……」

しばしの沈黙。

葉瑠「……あの、じゃあ、僕やります」

安芸「えっ！」

葉瑠「金曜と土曜だけなら、母さんたちには友達のうちで勉強するって言えばいいし。それに僕、前からバイト、してみたいなって思ってて」

樹「そうこなくっちゃ！　さっそく明日来てちょうだい」

葉瑠「わかりました」

安芸「ちょ、ちょっと待ってください二人共」

樹「だ、か、らぁ、心配ならアキも来ればいいじゃない？　帰りだってアキが一緒なら、葉瑠がナンパされることも無いだろうし」

安芸「……ニーナさん」

樹「まあまあ、そう拗ねないでよ。今日はパーッと奢るからっ」

バン、とテーブルに乗った樹の手。

その下には万札。

○樹のバー・店内（夜）

バーカウンターに乗った葉瑠の手。

その下には布巾。

葉瑠の手がカウンターを拭く。

高校のジャージ姿で手を動かす葉瑠。

樹の声「テーブルが終わったら、椅子もね。その次が床。掃除は上から順に」

箒の先が床を掃く。

樹の声「四角い部屋は四角く履くこと。ソファの下もしっかりね」

ソファを退かそうとする葉瑠。

樹の声「モップはぎゅっと固く絞って」

ぺしゃっとモップの先が床へ。

樹の声「横方向に動かしつつ、後退！」

モップ掛けをする葉瑠。

樹の声「店中のゴミは袋に集めて」

ゴミ袋の口を結ぶ葉瑠。

樹の声「外のゴミ箱にポイ」

○同・店の裏手（夜）

ポリバケツにストンと収まったゴミ袋。

蓋を被せる葉瑠の手。

葉瑠、パンパンと両手を払う。

裏口から顔を見せる、軽装にエプロン姿の安芸、にこにこと、

安芸「葉瑠くん、お疲れ様です。あの、お腹空いてません？」

○同・キッチン（夜）

調理台に並ぶ様々な料理。

安芸「メニューの練習をしてたんですが、葉瑠くんにも味見してもらえないかと」

樹は既に料理をつまんでいる。

箸と小皿を葉瑠へと手渡す安芸。

葉瑠、唐揚げをひと口食べ、咀嚼。

安芸「どうです？」

葉瑠「なんか……なんていうんだろう……」

安芸「……いまいちですか？」

葉瑠「いえ。むしろ好きな味っていうか」

料理を食べつつ、樹の目が葉瑠を窺う。

安芸「（器を寄せ）じゃあ、こっちはどうです？」

葉瑠、次にミートボールを食べる。

葉瑠「うーん……おいしいですよ？」

安芸「（曖昧に笑い）そう……ですか」

葉瑠「なんか、懐かしいような味がします。食べたことあるような……」

樹「だって。よかったわね、アキ。息子のお墨付きじゃない」

安芸「（咎めるように）ニーナさん」

樹「だってアンタ、真由美のレシピ通りに作ったんでしょ？　それで『食べたことある味』って言わせたんだから」

葉瑠「レシピ？　母さんの？」

樹「そ。うちの料理はぜんぶ、真由美がレシピ考えてんの。昔からの定番メニューから、季節限定の新メニューまで」

樹、新旧数冊のレシピ本を取り出して見せる。

葉瑠、目を伏せ、箸と小皿を置く。
気まずい表情の安芸。
樹、肩を竦め、掛け時計を見る。
時刻は午後六時五十七分。
樹「そろそろ開店時間ね。あ、そうそう。さすがに学校のジャージじゃアレだから、シャツとパンツ買ってきといたわ。ロッカールームにあるから」
葉瑠、踵を返して歩いていく。
○水越家・外観（夜）
○同・二階・拓真の部屋（夜）
風呂上がりの拓真、入ってきて携帯を取り上げ、画面を見、
拓真「まだ既読ついてない。ハルのやつ……」
○新宿二丁目の通り（夜）
○樹の店が一階に入った小ビル・外観（夜）
樹と女たちの笑い声。
○樹の店・外観（夜）
看板には『platinum nail』の文字。
○同・店内（夜）

ビアンカップルと談笑する樹。

女1「（笑って）もー、ニーナさいこー！　あ、そうだ忘れてた、今何時？」

樹「八時四十五分。映画、九時十五分からでしょ？　楽しんできてね」

会計をしつつ席を立つカップル。

女2「ニーナぁ、唐揚げ超美味しかったぁ」

樹「ありがと。（冗談で）シェフに言っとくわ」

○同・入り口扉外（夜）

カップルを見送る樹。

札をＯＰＥＮからＣＬＯＳＥＤへ替える。

○同・キッチン（夜）

時刻は午後八時五十分。

エプロン姿で食器を洗う葉瑠。

安芸は料理の下準備をしている。

樹が入ってくる。

樹「お疲れ様ぁ。そろそろ上がっていいよぉ」

安芸「ニーナさん。お疲れ様です」

黙って洗い物を続ける葉瑠。

安芸、葉瑠を気にしつつ、エプロンを

外し、

安芸「あの、じゃあ……料理の下準備は済んでますから。唐揚げはあと揚げるだけ。ミートボールは温めるだけ。卵焼きは焼くだけにして、大根おろしもおろしてあります。それと――」

樹「あ、ああ、待って！　あのねアキちゃん……今日もうね、閉店！」

安芸「閉店？　開店からまだ二時間ですけど」

樹「（葉瑠を気にしつつ）ごめんごめん。なんか今日、いつもより疲れちゃって……」

葉瑠、食器洗いを終えて蛇口を閉め、樹を振り向き、

葉瑠「それじゃ、僕も終わったので。……お疲れ様です」

丁寧に頭を下げ、すぐに踵を返す。

樹、葉瑠がキッチンを出る直前、

樹「待って」

振り向く葉瑠。

樹「葉瑠……カラオケ行かない？　アキも」

葉瑠「疲れたんじゃないんですか？」

樹「そうよ、疲れたの、心が。……だから」

安芸「……あ、僕いい店知ってます！　グループの中にゲイかビアンのカップルがいれば、グループ全体の利用料金から二割引きっていう。なので、葉瑠くんがいれば……」

と、自分と葉瑠を交互に指差す安芸。

大げさに頷く樹。

葉瑠、そんな二人を見て次第に頬を緩め、ついには笑う。

葉瑠「なんか変。あんたたち」

ホッと目を見合わせる安芸と樹。

○カラオケ店・外観（夜）

酔った樹の酷い歌が聞こえている。

○同・ルーム内（夜）

テーブルには飲み散らかした酒のグラスと、アルミホイルで包んで持参した唐揚げ、ミートボール、卵焼き等々。

ソファで飛び跳ねて歌う樹。

適当にタンバリンを振る安芸。

携帯で文字を打つ葉瑠。
その画面、
拓真、『今何してる』17:36に対し、葉瑠、『遅くなってごめん。今ニーナさんとアキさんとカラオケ中』21:43。
葉瑠「よし。次……」
しかし葉瑠、手が止まる。
安芸「葉瑠くん、どうかしました？」
葉瑠「あ、えっと。母さんになんて連絡しようかなって」
樹、飛び寄ってきて携帯をぶん取り、
樹「貸して。こんなのはねぇ……」
と、三人が映るよう自撮りの構えをし、
樹「こうで……」
パシャッと光るフラッシュ。
葉瑠「うわっ」
すぐさま飛び逃げていく樹。
樹「こうよ！　……はいオッケー！」
投げ返される携帯。
葉瑠「わ、ちょっと！」

と、かろうじて受け止める葉瑠。
開いているのは『ハルと愉快……』のグループトーク画面。
今撮った写真がアップされている。
葉瑠「あ、既読ついた……二つ」
安芸、両手を上げて首を横に振る。
樹、歌っている。
葉瑠「ねぇアキさん、この部屋っていつまでいられるんです？」
安芸「フリータイムで入ってるので、最長で明日の朝、五時までですけど」
葉瑠「ふーん……」
携帯を置き、立ち上がる葉瑠。
葉瑠「僕も歌おうかな」
と、デンモクで樹の曲を中止し、自分の洋楽ロックを割り込ませる。
樹「え、ちょっと！　がきんちょ！」
葉瑠「ずるいんですよ、一人だけ。ほら、アキさんも歌いましょ？」
葉瑠、安芸の腕を引き、立たせる。

安芸「（戸惑い）いえ、僕、これ系はちょっと」

葉瑠、構わずノリノリで歌い出す。

葉瑠M「父さんと母さんを、試したいような気持ちが半分。この二人と、もう少し一緒にいたいような気持ちが半分」

いつの間にか休憩している樹、酒を飲み、意味深な眼差しを葉瑠へ。

が、すぐ立ち上がり、一緒に歌い出す。

テーブルの上、葉瑠の携帯が着信を受けて震えている。

しかし、気づく者はいない。

○百々海家・ＬＤＫのダイニング（夜）

携帯のコール音。

テーブルには五人分の夕食。

が、三席は空席。

夕刊を読んでいる康一と、電話を耳に当てている真由美。

真由美、諦めてコールをやめる。

康一「あんまりしつこいと嫌われるぞ」

真由美「あんまり無関心でも嫌われるわよ」

康一、新聞を下ろし、真由美を見る。
真由美も康一を見ている。
キッチンカウンターには、家族写真。
葉瑠M「仮面を被って生きている」
○水越家・二階・拓真の部屋（夜）
葉瑠からの返事を見、憂い顔の拓真。
○東京の街並み（朝）
東の端が明るみ始めている。
葉瑠M「仮面を外して向き合える相手を」
○カラオケ店・ルーム内（朝）
ソファで寝入る樹と安芸。
葉瑠M「ずっと……ずっと……」
ソファの端で携帯をいじる葉瑠。
葉瑠M「求め続けている」
画面を見つめ、一人微笑む。
画面にはグループ名『バイト』『ハルがニーナとアキを招待しました』。
○スズメのいない電線（朝）
葉瑠M「父さんと母さんは何も言わなかった」
○都立西南高校・三階・２年Ａ組教室内（昼）

授業中、窓の外を眺めている葉瑠。

葉瑠M「まともな連絡もせず朝帰りした僕を見ても、酔いが抜けずにふらふらだったニーナとアキさんを見ても」

葉瑠の携帯からバイブ音。

画面を見る葉瑠。

安芸の声「学習参考書の棚、一新しました」

『帰りに寄ります』と、打ち返す葉瑠。

○同・別棟一階・第二理科室内（夕）

文化祭実行委員会の活動。

立って発言をしている葉瑠。

○過去屋書店・店内（夜）

参考書を一冊手に取る葉瑠。

やってきて話しかける安芸。

談笑する二人。

○樹のバー・店内（夜）

カウンターにいる樹へ料理を渡す葉瑠。

客の女に声援を送られ、赤くなり、お辞儀をしてキッチンへ逃げ去る。

○都立西南高校・三階・2年A組教室内（昼）

教室後方に退けられた机。
そこへ女子たちが座り、縫い物や室内装飾作りをしている。
教室前方にはブルーシートとベニヤ板、角材、工具。
数人の男子を集め、外看板につける補強枠の説明をする葉瑠。
遠巻きに見ている中名生、虹、温井。
風花、葉瑠の隣へひょいとやってきて、看板のデザイン案を見せる。
距離の近さにドギマギしつつ見る葉瑠。
前の廊下をちょうど拓真が通りかかり、教室内の葉瑠を一瞥していく。
デザイン案には『メイド喫茶ＡＡ』の文字を盆に乗せているメイドが。

○秋葉原駅・改札前（昼）

柱の前に立つ樹と安芸。
改札を出て走り寄っていく私服の葉瑠。

○秋葉原のメイド喫茶（昼）

テーブルにつく三人、傍らに屈むメイ

ドの手元を凝視している。
メイド、ケチャップでオムライスに絵を描いている。
葉瑠の前に差し出されるオムライス。
そこには猫の絵と『はるさまへ』。
静かに感激する葉瑠。
嬉しそうな樹と安芸。

○秋葉原の大通り（昼）

歩く三人。
チェキを取り出し眺める葉瑠。
映っているのは葉瑠たち三人とメイド。
とあるフィギュアショップを指差す樹。
そのまま入っていく樹と、あとを追う葉瑠と安芸。
三人は楽しげ。

○百々海家・ＬＤＫ（夜）

五人揃っての夕食。

康一「葉瑠、最近学校はどうだ？」
葉瑠「どうって、別に……いつも通りですよ」
安芸「文化祭、今週末なんですよね？」

葉瑠「うん、金土と二日間。金曜が校内祭で、土曜が一般公開日」

樹「へー、それって、土曜は誰が行ってもいいってことよね？　じゃああたしも見れるじゃない、葉瑠のメイ――」

葉瑠「あああ！　そうだけど、（笑顔で）絶対来ないでね」

真由美「金土ってことは、今週はお友達のうちでの勉強会は無いのね？　ここのところ毎週やってるじゃない」

葉瑠「はい。今週はパスするつもりです。いつも夜遅くなってすみません」

樹「なーぁんて、素直ぶっちゃって。ねぇ真由美、こういう子に限って、大学生になった途端、タガが外れたみたいに朝帰りするようになるのよ」

葉瑠「ちょっと、やめてよニーナ」

樹「（からかうように笑って）えぇ？」

真由美「そうよ。やめて樹。大学生になったら、葉瑠は帰ってこないわ」

微笑みを消し、きょとんとする樹。

安芸「マユさん？」

康一「宗介。葉瑠は卒業したら、道大に行くんだ」

安芸「道大？　って、北海道の……？」

樹「なんでそんなとこ行くのよ。大学なんて東京に腐るほどあるじゃない。アンタ、酪農でもやりたいわけ？」

目を伏せて答えない葉瑠。

ハッと葉瑠の考えを察してしまう樹。

家の電話が鳴る。

席を立つ真由美。

樹「あ、あたしもう出なきゃ」

真由美、受話器を押さえて振り向き、

真由美「今日はお店はお休みでしょ？」

樹「ごめん、言ってなかった。友達の店のヘルプ頼まれてるの。じゃあ」

樹、出ていく。

真由美「もうっ」

と言い、電話を再開。

康一、食べ終えて席を立つ。

安芸「コウさん、ごちそうさまくらい言ってくださいよ」

康一「ごちそうさま」

と、ソファに座り、テレビを点ける。

食事途中だが立ち上がる葉瑠。

安芸「葉瑠くん？」

葉瑠「ごちそうさまでした」

と、ＬＤＫを出ていく。

一人残された安芸、溜息をつく。

樹の声「葉瑠たち親子が上手くいってないことなんて、前から知ってたじゃない」

○樹のバー・店の裏手（夜）

話をする樹と安芸。

安芸「でも北海道ですよ？　いいんですか？　一度行ってしまったら、少なくとも四年は帰ってこないんです」

樹「いいかどうかなんて、あたしたちが口出すこと？　あたしたち、ただの愛人よ？」

安芸「わかってます。わきまえなきゃいけな

いことも、愛人以上にはなれないことも。
コウさんとマユさんは子どもが欲しくて…
…葉瑠くんが欲しくて、結婚したんですよね。お互いに異性を愛せないってわかってて、それでもどうしても、血を分けた子どもが欲しくて……」

樹「そうよ。好きでもない相手とセックスしてでも欲しかったのよ。あたしたち、一生、愛する人の一番にはなれないわ。それでもしょうがないじゃない、愛人だろうがなんだろうが。だって、傍にいたいんだもの」

○同・裏口の内側（夜）

ノブを掴んだまま立っている葉瑠。
そっとノブから手を離し、踵を返す。

葉瑠M「わからない。自分がどうしたいのか。何を考えているのか。……家を出たいと、それればかりだったはずなのに……今は……」

○都立西南高校・別棟一階・第二理科室内（昼）

黒板には『1分間CMについて』。

司会生徒「例年のことなので二、三年生は知

っていると思いますが、西南祭一般公開日となる土曜日には、各クラスへ、屋外ステージでの一分間ＣＭの時間が与えられます。これは、各クラスの代表が屋外ステージに立ち、一分間でそれぞれのクラスの出し物について、紹介を行うというものです」

説明は続く。

が、ノートの端に何かを書く葉瑠。

それを、正面に座る風花へ。

風花、気づいて見る。

ノートには『メイド服は順調？』

風花、答えを書く。

『ほぼＯＫ。ただ、男子で三人、採寸まだ。のらりくらり逃げられて』

葉瑠、『誰？』

風花、『なかのみょう、にじ、ぬくい』

葉瑠、『帰りに話してみる』

顔を見合わせ、頷き合う二人。

○同・三階・２年Ａ組教室内（夕）

教室前方、ブルーシートの上、完成間

近の外看板が乾かしてある。
帰り支度をする生徒たち。
委員会を終えて戻ってきた葉瑠と風花。
葉瑠、自席で帰り支度をしつつ室内を
見回し、近くの男子へ、
葉瑠「ねぇ、中名生たちってもう帰った？」
男子「あ、うん、三人とも今日は早かったな」
別の男子「いやでも中名生は吹部だろ？」
男子「そっか。じゃあまだ残ってるかも。吹
部は最終下校ギリギリまで練習するから」
葉瑠「ありがと」
そこへ近づいてきた風花、
風花「採寸、担当の子に聞いたら、今日もで
きなかったって」
葉瑠「わかった」
葉瑠、バッグを持って席を離れる。
○同・別棟三階・第一音楽室前廊下（夕）
最新のポップスを合奏する吹奏楽の音。
そこへやってきた葉瑠。
開いた窓からトランペットを吹く中名

生の姿が見える。
葉瑠のポケットで、携帯の通知バイブ。
取り出してみると、拓真からである。
拓真、『どこ？』。
葉瑠、『ごめん、遅くなるから先帰って』。
葉瑠、壁に凭れて曲に耳を傾ける。
○同・時間経過後（夜）
部活を終えて出てくる吹奏楽部員たち。
葉瑠、中名生が出てくるのを見つけ、
葉瑠「中名生」
中名生「ん？　あれ、みはるちゃんじゃん」
葉瑠「話があるんだけど。五分だけ」
下校を促す顧問の声。
中名生「（顧問を気にし）歩きながらでいい？　てかわかった、あれだ、メイド服の話？」
昇降口へ向かいつつ、早口で話す二人。
葉瑠「うん」
中名生「やっぱな。あのさ、他の二人は悪くないから。アイツらはただ、オレに合わせてくれてんの」

葉瑠「じゃあ、着たくないのは中名生だけ？」
中名生「……わりぃけど、説得とか無理だから。オレは着ない。カッコつけてるとかそーゆーんじゃねんだよ。女子にメーワク掛けてんのもわかってる。あのさぁ……百々海。ドジョウ掬いの恰好とか全身タイツとかなら喜んでやってやるぜ？　でもメイド服は着ない。わかるか、この違い？」
　じっと中名生を見つめる葉瑠。
葉瑠「わかるよ。だから説得じゃなくて、別の提案をしに来たんだ」
中名生「……提案？　どんな」
葉瑠「君たち三人に、執事服を着てもらう」
中名生「はっ。執事服？　まぁドジョウ掬いとは言ったけどさ。是が非でもコスプレさせんのな」
葉瑠「そこは譲れないよ。メイド喫茶なんだから、何かしらそれっぽいの着てなきゃ」
中名生「制服のまま裏方じゃ駄目なわけ？」
葉瑠「駄目。全員がシフト制で店員をやる、

ってのは、多数決で決まったことだよ？」

中名生「多数決ねぇ。オレあれ嫌いだわ。マジョリティ優先！　マイノリティの意見は一切排除！」

葉瑠「嫌いでもいいから、答えは？　やるか！　やらないか！」

ちょうど昇降口の下駄箱前につき、それぞれ立ち止まる二人。

中名生「……わかった。女装じゃないならまぁいいや。でも、オレらだけ別衣裳って、クラスの連中が納得するか？」

葉瑠「納得させるために、君たちにはペナルティを負ってもらう。中名生は、僕と一緒に一分間ＣＭに出ること。虹と温井にはそれぞれ、当日のシフトを皆の倍割り当てる」

中名生「なるほどね。それで、肝心の執事服はどうすんの？　予算ぜってーもらえねぇだろ」

葉瑠「借りるあてがあるんだ」

中名生「……サイズ違いで三人分だぞ？」

葉瑠「たぶん大丈夫。まぁ交換条件にはなるだろうけど、相手の要求は読めてるし」

中名生「は？　誰に借りる気だよ？」

葉瑠「家族」

と、微笑む葉瑠。

中名生、じっと葉瑠を見つめ、

中名生「……オレさぁ、なんか、お前のこと、いけ好かねぇって思ってたけど……嫌いじゃないかも。なぁ、ハルって呼んでい？」

葉瑠、意外そうな表情をするも、

葉瑠「いいよ。じゃあ僕も、ツバサって呼ぶ。『中名生』って、言いづらいんだ」

フッ、と笑みを零す二人。

下駄箱の裏で誰かが立ち聞きしている（それは拓真である）。

○都立西南高校・屋外（昼）

『西南祭』と書かれたアーチ。

立ち並ぶ各クラスの宣伝看板。

連なる屋台と、賑わう人々。

○同・校舎内（昼）

装飾され、屋外と同じく賑わっている。

○同・三階・2年A組教室内（昼）

喫茶店風に装飾された室内。

メイド服でにこやかに接客する風花。

屋外ステージ司会者の声「はいっ、終了です！」

○同・屋外・屋外ステージ（昼）

端には司会者、中央には一分間CMを終え疲労している葉瑠と中名生。

葉瑠はメイド服、中名生は執事服を着、それぞれ看板を持っている。

司会者「お疲れ様でした。いやぁ、夫婦漫才のように息の合ったCMでしたね？」

葉瑠に向けられたマイク。

が、中名生、突然葉瑠の肩を抱き、

中名生「そりゃもう、オレらデキてますから」

女子の歓声と男子の冷やかしが飛ぶ。

葉瑠、驚き呆れつつも雰囲気に乗り、

中名生に寄り添ってみせる。

葉瑠「ご主人人様、お嬢さま方のご帰宅を、二人揃って、お待ちしております！」

と、観客へ微笑んだ葉瑠、ハッとする。
観客の中に家族四人の姿がある。
康一と真由美が隣り合い、少し離れたところに樹と安芸の二人がいる。
四人とも、周囲に比べて大人しい。
樹と安芸の声「コスプレ用の執事服？」
×　×　×
（フラッシュ）
百々海家、夕食の席。
樹「当てはあるわよ」
安芸「僕も、貸してくれそうな人知ってます」
にんまりとして視線を交わす樹と安芸。
不思議そうにしている康一と真由美。
樹「用意してもいいけど、条件があるわ」
安芸「迷惑は絶対かけません。だから葉瑠くん、今度の文化祭、僕たちも――」
葉瑠を見つめる樹と安芸。
屋外ステージ司会者の声「２年Ａ組のお二人でしたー！」
×　×　×

拍手をする康一と真由美、樹と安芸。
お辞儀をし、退場する葉瑠と中名生。
校舎の窓から二人を見ている影（拓真）。
薄っすらと微笑む葉瑠の横顔。

○同・三階・２年Ａ組教室内（昼）

喫茶店は満席。
忙しく接客をする葉瑠、中名生、風花ら生徒たち。
入り口付近の席に康一と真由美、窓際の席に樹と安芸のペアが座っている。
風花、飲み物を運ぶ葉瑠に近づき、
風花「ね、見て？　あそこ、すごい美男美女」
葉瑠、樹と安芸を一瞥し、苦笑。
葉瑠「うん、ほんと」
葉瑠、飲み物を両親の席へ。
葉瑠「お待たせいたしました、ホットコーヒーです」
真由美「来ちゃってごめんね。すぐ帰るから」
葉瑠「いえ、ゆっくりしてってください」
真由美「（葉瑠の全身を見て）可愛い衣装。よ

く似合ってる。ね、コウさん？」

康一「（頷き）なかなか……いいと思う」

葉瑠「（苦笑し）ありがとうございます」

中名生、横から顔を出し、

中名生「旦那様、こちらのメイドがお気に召しました？　よければ一緒に写真などウッ」

中名生を肘で小突いた葉瑠、

葉瑠「（小声で）馬鹿」

中名生「（笑って）えぇ？」

康一と真由美、首を傾げる。

そこへ、別のテーブルにいる風花、

風花「お嬢様より、集合チェキのご要望です！」

該当テーブルに集まる給仕係の面々。

インスタントカメラを持った風花、自分が入れないことに気づく。

風花「そっか、どうしよ」

そこへ近づく影――安芸である。

安芸「よければ、お撮りしますよ？」

風花「ありがとうございます。このボタンを」

安芸、カメラを受け取り、

安芸「わかりました。ではいきます。（構えて）
1＋1は？」
並んだ面々「にぃー！」
フラッシュが光り、写真が出てくる。
○同・三階・2年A組教室内・時間経過後（昼）
葉瑠の手がクッキー盛りを置く。
そこは樹と安芸のテーブルである。
葉瑠「お礼です、ご主人様、お嬢様」
葉瑠を見上げる樹と安芸。
安芸「さっきの、写真の？」
葉瑠「うん。それと、いろんなこと」
樹「……じゃあ、ありがたくいただくわ」
安芸「僕も」
と、クッキーに手をつける二人。
あくまで葉瑠とは他人のフリでいる。
葉瑠、自分の仕事へ戻っていく。
虹と温井と一人の女子、外での宣伝から戻ってくる。
虹「はー疲れたぁ。腹減ったぁ」
温井「オレたちまだ解放されないのぉ？」

女子「まだ駄目。アンタたちのシフトはあと三十分残ってる」

風花「まぁこれでも食べて」

と風花、二人の口にベビーカステラを押し込む。

虹と温井「（切なげに）うまい……」

風花「（くるりと振り向き）じゃあ、百々海くん！　中名生くん！　次、宣伝行こっか！」

それぞれ振り向く葉瑠と中名生。

○同・屋外（昼）

『メイド喫茶ＡＡ　２－Ａ教室』と書かれた宣伝ボード。

葉瑠「２年Ａ組、メイド喫茶やってまーす」

中名生「お前、それじゃ全然聞こえねぇって。貸してみろ。……メイド喫茶ぁ！　３階、２－Ａ教室ぅ！　ご主人様、お嬢様方のご帰宅をぉ！　心よりぃ――」

呆気に取られている葉瑠と、くすくす笑っている風花。

○同・三階・２年Ａ組教室内（昼）

入ってきた拓真、虹と温井へ、

拓真「お疲れ。ハルは？」

虹「百々海なら、中名生たちと出てるけど」

踵を返して出ていく拓真。

虹「なんだあれ……」

温井「さあ」

○同・屋外・模擬店前通路（昼）

宣伝文句を叫ぶ風花。

その後ろを並んで歩く中名生と葉瑠。

こっそり談笑する二人だが、突然、葉瑠の肩に背後から手が掛かり、葉瑠はそのまま後ろへ引っ張られる。

葉瑠「うわっ？」

中名生「え？」

と振り返る中名生、葉瑠が引っ張られていくが、

中名生「ハル……！」

と呼ぶだけで呆気に取られて見送る。

風花「ちょっと、なにサボってんの！　というか百々海くんは？」

中名生「さらわれた……」

風花「は？　誰に」

中名生「……B組の」

○同・屋外・模擬店前通路・時間経過後（昼）

強引に手を引かれて人混みを歩く葉瑠。

葉瑠「ねぇちょっと、どうしたの、タク？」

拓真、答えない。

葉瑠「僕まだクラスの仕事が……ねぇ聞いてる？　怒られちゃうよ」

○同・屋外・人混みから離れた場所（昼）

ようやく拓真の手が離れる。

葉瑠「（拓真の背へ）タク……？」

拓真「馬鹿。馬鹿ハル」

葉瑠「え？」

拓真「ビアンとゲイと暮らしてればちったぁ気づくかと思ったけど、お前は全然だし、それどころか、お前を嫌ってたやつとか女子とかと仲良くなってるし。（振り返り）……なぁハル、お前、オレがいつも何考えてるか、考えたことあるか？」

○同・屋外・人混み（昼）

帰り際の康一と真由美が通りかかり、

真由美、遠目に葉瑠らを見つける。

真由美「あ、あれ、葉瑠と拓真くんじゃない？」

声を掛けようとする真由美だが、葉瑠らの異常を察した康一に阻止される。

真由美も葉瑠らの異常に気づく。

去っていく拓真。

立ち尽くす葉瑠。

康一「行こう」

康一、真由美を連れてその場を離れる。

○同・屋外・人混みから離れた場所（昼）

葉瑠に駆け寄ってくる風花と中名生。

風花「百々海くん！　こんなとこにいた」

中名生「一人か？　おいハル、大丈夫かよ？」

呆然としている葉瑠。

顔を見合わせる風花と中名生。

○百々海家・ＬＤＫ（夜）

五人の食卓。

文化祭の話をする、葉瑠以外の四人。

思いつめ、あまり箸の進まない葉瑠。

×　×　×

（フラッシュ）

拓真「オレがいつも何考えてるか、考えたことあるか？　……ごめん、頭湧いてるわオレ。しばらく……朝も昼メシも別行動な」

去っていく拓真。

×　×　×

葉瑠、箸を置く。

真由美「……もういいの？」

葉瑠「あ、はい。ごめんなさい。模擬店で食べ過ぎてしまって。ごちそうさまでした」

席を立つ葉瑠。

話を再開する樹と安芸。

葉瑠を案じ視線を交わす真由美と康一。

葉瑠M「一体なんだというんだろう」

○百々海家前（朝）

門から出てきた葉瑠、水越家前に拓真がいないのを見、一人で歩き出す。

○都立西南高校・三階・2年A組教室内（昼）

授業中、勉強に身が入らない葉瑠。
葉瑠M「僕は何か、タクの気に障ることでもしたのだろうか」
チャイムが鳴り、起立、礼。
そして昼休みへ。
弁当を机上に出す葉瑠。
中名生がやってきて、
中名生「な、ハル。たまにはオレらと一緒に食おうぜ？」
友達のところにいた風花、振り向き、
風花「え、百々海くん、今日はここで食べるの？　ならあたしたちも混ぜてよ」
葉瑠「あっ、ううん、ごめん、僕は……」
と、弁当を持ちそそくさと教室を出る。
○同・三階・廊下（昼）
B組とは逆方向へ歩いていく葉瑠。
拓真の声「それどころか、お前を嫌ってたやつとか女子とかと仲良くなってるし」
○樹のバー・キッチン（夜）
樹「えぇ？　バイト辞めたいぃ？」

樹と対面している葉瑠。
上がり作業中の安芸、手を止めて二人を振り向く。
葉瑠「ごめんなさい。勉強が少し、忙しくなってきて」
樹「……そ、っか。ならしょうがないね。もともと無理言って頼んでたわけだし。新しいバイトの子も見つかったから……まあ」
樹の背後、バーカウンターの方からバイトの女の接客する声が聞こえてくる。
葉瑠「ほんと、突然すみません……じゃあ、お疲れ様でした」
頭を下げて出ていこうとする葉瑠。
安芸「あ、待って葉瑠くん。僕ももう上がりますから、一緒に――」
葉瑠「いえ大丈夫です。一人で帰れます」
葉瑠、キッチンを出ていく。
樹「なに……アンタ葉瑠になんかした？」
安芸「僕ですか！　するとしたらそっちでしょう？」

顔を見合わせる樹と安芸。

○同・ロッカールーム（夜）

制服に着替える葉瑠。

拓真の声「ビアンとゲイと暮らしてればちったぁ気づくかと思ったけど、お前は全然だし」

バンッ、と葉瑠の手が、ロッカーの戸を強く閉める。

○新宿二丁目の通り（夜）

駅までの道をとぼとぼ歩く葉瑠。

葉瑠M「なんなんだ。何に気づけって？」

中年男が一人、葉瑠に寄ってくる。

拓真の声「馬鹿。馬鹿ハル」

男「ねぇ君、家出？　ホ別3でどう？」

葉瑠「うるさい！　黙れ！」

駆けていく葉瑠。

唖然として見送る男。

男「そんな言い方……アタシ傷ついちゃう……でもイイ（恍惚と）」

○ビルとネオンに切り取られた空（夜）

葉瑠M「夜になっても眠らない新宿の街は、
僕にとって、夢の中のような世界だった。
アキさんとニーナは、夢の世界の人だった。
憧れは、確かにあった。それでも僕は、現
実の人にしかなれない」

○百々海家・二階・葉瑠の部屋（朝）

外は雨。

起床時間前、既に目が覚めている葉瑠。

枕元で携帯の通知バイブ。

慌てて携帯を見る葉瑠。

葉瑠「なんだ、ニーナか……」

脱力し、ばふ、と枕に顔を埋める。

○水越家・外観（夜）

○同・二階・拓真の部屋（夜）

葉瑠に連絡しようとするもやめる拓真。

玄関チャイムが鳴る。

○同・庭（夜）

玄関を出る拓真。

門の外に真由美が立っている。

拓真「あっ、こんばんは。（門へ向かいつつ）

すいません、まだ母ちゃん帰ってなくて」

真由美「いいのいいの。突然ごめんなさいね。あの、これ……作り過ぎちゃって……」

真由美、門越しにタッパーを差し出す。

拓真、受け取り、

拓真「いいんですか？」

真由美「お稲荷さんなんだけど、よかったら」

拓真「すいません。いつももらってばっかで」

真由美「ううん、私もお母さんから、出張先のお土産とかいただくもの。それに、拓真くんはいつも葉瑠と仲良くしてくれるし」

拓真「あ……はい」

拓真、気まずく思い、顔を逸らす。

拓真「……ハルから、聞きました？」

真由美「……何を？」

拓真「……いえ……すいません。オレは……ハルから聞いてます、おばさんたちのこと」

真由美「そう。気にしないで。そうだろうと思ってた。ハルが、拓真くんに相談しないなんてことあり得ないもの」

浮かない表情の拓真。

真由美「葉瑠と、喧嘩でもした？　ごめんなさいね、あの子、頑固なとこあるから……」

拓真「やっ、違います。喧嘩っていうか……悪いのは完全にオレの方で……でもなんていうか、上手く説明できなくて……ハルにも……だから」

黙って拓真を見つめる真由美。

拓真「オレほんと、自分のことばっかりで……ハルに、『気づいてくれない』とか変なこと言ってるし、ハルが気づかないのは、オレが隠してるから……当たり前のことで……なのにオレ、道大目指してるハルに早生葉行こうとかバンド組もうとか、自分の希望ばっかり押しつけて……」

真由美「（独り言）早生葉……バンド……」

拓真「ハルのこと、大事な親友だって思ってるのに……アイツが他のやつと仲良くしてるの見ると……なんか……嫌な気分になって……それが……こんなっ、醜くて、やら

しくてっ……！　オレ、変なんでしょうか」

真由美「え？」

拓真「オレ、ハルに……恋してるんでしょうか」

葉瑠の声「タク……」

百々海家の庭を振り向く拓真と真由美。

そこには葉瑠が立っている。

拓真「ハルっ、お前……」

葉瑠、家の中へ駆け込んでいく。

○百々海家・ＬＤＫ（夜）

屋内に響く葉瑠の足音。

康一と安芸、おっと驚く。

○同・二階・葉瑠の部屋（夜）

ドアを背に、息を切らす葉瑠。

力が抜けて、座り込んでしまう。

○百々海家前（朝）

門から出てくる葉瑠。

拓真はおらず、ハルは歩き出す。

葉瑠Ｍ「『恋とはどんなものかしら』」

○住宅街（朝）

葉瑠M「オペラの曲で、そんなタイトルのがあった気がする。ふと、思い出した」

イヤホンを耳に入れた葉瑠、英単語を聞こうとするもやめ、曲を検索する。すぐにその動画を見つけ、再生する。

流れ出すオペラ歌手の歌声。

○学校へ向かう葉瑠（朝）

電車の中、新宿駅構内、シャッターの閉じた過去屋書店の前、大通りには落ち葉が積もっている。

○都立西南高校・三階・2年A組教室内（昼）

休憩時間、机に伏せている葉瑠。

葉瑠を遠目に見つつ、風花と中名生、

風花「百々海くん、最近元気無くない？」

中名生「てかアイツ、昼メシどこで食ってんの？　この前昼休みにB組覗いたら、水越は別のやつと食ってたぞ？」

風花「覗いた、ってなにそれストーカー？」

中名生「うるせぇな。普通に誘っても断られんだろ？　だったら水越と食ってるとこに

乱入してやろうかと思って」

風花「うわ、キモ。まぁそれはいいとして、百々海くん、水越くんと喧嘩でもしたのかなぁ？　それで元気無い……？」

中名生「喧嘩が理由か？　だったらなんでオレらにもそっけないんだよ」

風花「喧嘩の理由が私たちに関係してるとか」

中名生「……マジ？」

葉瑠、二人の会話が聞こえており、

葉瑠「（独り言）うるさい……」

○百々海家・二階・葉瑠の部屋（昼）

掃除機を掛ける真由美。

ふと思い立ち、本棚の本を探り始める。

すると一冊カバーの合っていない本が。

カバーは国立用の問題集だが、中身は私大用の問題集である。

真由美、次に、躊躇いつつ、机の引き出しを開け始める。

すると、音楽雑誌や洋楽ロックのＣＤが隠されているのを見つける。

×　×　×

（フラッシュ）

拓真「道大目指してるハルに早生葉行こうとかバンド組もうとか」

×　×　×

何かに気づき始める真由美。

ふと、デスクマットに挟まった模擬試験の結果を見つける。

それをじっと覗き込む。

第一志望は北道大学経済学部。

が、第四志望に早生葉大学政治経済学部の文字が。

何か、が確信に変わる真由美。

○百々海家の最寄り駅前（夜）

改札を出てくる葉瑠。

康一の声「おーい……おーい……」

葉瑠、気づかずイヤホンをつけようとするも、そこへ康一が駆け寄ってきて、

康一「おーい、葉瑠」

葉瑠「（驚いて）父さん……！」

○住宅街（夜）

並んで歩く葉瑠と康一。

康一「一緒に帰るのは初めてだな」

葉瑠「はい」

康一「二人共、毎日同じ路線を使ってたのに」

葉瑠「そうですね……」

康一、深呼吸をして、

康一「最近、急に寒くなったなぁ」

葉瑠「はい」

康一「最近、葉瑠……何か悩みでもあるんじゃないか？」

葉瑠「……どうしてです？」

康一「いや、なんというか……」

葉瑠「悩みなら、いつだってありますよ。いつだってありました。どうして今さら聞くんです？」

康一、言葉が見つからない。

葉瑠「……ごめんなさい。こんなこと言うつもりじゃ……無いですよ、悩みなんて。僕は多分、恵まれてる方です」

康一「……今さらじゃ、駄目か？　俺はずっと、お前とどう接したらいいかわからなかった。だからせめて金だけは惜しむまいと思ったんだが……お前はあまり物を欲しがらなかったな。お前は……俺たちからどんどん、離れていくばかりだった。だけど俺は今、アキと出逢って、アキに教えられて、ようやく、人との関わり方がわかったんだ。俺はやっと、自分がお前とどう接したいかがわかった。父親として」

葉瑠、黙って康一を見上げる。

康一「本当は駅で、何度もお前を見かけてた」

葉瑠M「僕も見かけてたよ、父さん」

康一「声を掛ける勇気が無かったんだ」

葉瑠M「声を掛けたくなかったんだ」

康一「父親なのに。望んで父親になったのに。……すまない葉瑠」

葉瑠「謝らないでください。謝られても、僕にはなんて答えていいかわからない。……わからないんです」

葉瑠、虚ろに、行く先を見つめる。

葉瑠M「今さら……今さら、普通の親子になんて戻れない」

葉瑠の携帯の通知バイブが鳴る。

携帯を取り出して見る葉瑠。

安芸の声「大事なお話があります。今からいつものファミレスに来てください」

樹の声「来ないと、メイド姿の葉瑠の写真、ゲイ交流サイトにアップするから！」

葉瑠「なんだこれ……」

康一「ん？」

葉瑠「……あのっ、すみません父さん、ちょっと用事ができてっ……先帰っててください、あと、晩ご飯はいらないと母さんに」

葉瑠、来た道を駆け戻っていく。

○百々海家最寄りのファミレス・外観（夜）

葉瑠の声「（怒って）なにあの脅迫っ……」

○同・店内（夜）

葉瑠、樹と安芸の正面に座っている。

オロオロする安芸と、腕組みして俯い

ている樹。

葉瑠「アキさんまで……」

安芸「いや……ごめんなさい葉瑠くん」

葉瑠「……ニーナの店のバイトなら、（樹を見て）もうしないからね？」

樹「葉瑠アンタ……なんか隠してるでしょ」

安芸「（小声で）待っ、そんな度直球な」

樹「吐きなさい。吐いてスッキリしちゃいなさい」

葉瑠「……無いですよ、そんなの」

安芸「葉瑠くん、あの……僕たち、葉瑠くんが最近何か悩んでるように見えて、だから……一人で抱え込むよりは……」

葉瑠「悩みなんて無いよ……なんにも無い」

樹「……そう。じゃあ、あたしの悩みを聞いてくれる？」

葉瑠、沈黙ののち、嫌そうに苦笑し、

葉瑠「ねぇ、何がしたいの？　そうやって、僕にもなんか喋らそうって？」

樹「聞いてほしいの。あなたより二十も年上

の女の悩みよ。貴重でしょ？　あたし、二十歳の誕生日にね、自分がビアンだってこと、親にカミングアウトしたの。そしたら、その日のうちに勘当された。出てってほしいって言われて、あたし、泣きながら家を出たわ。理解してもらえると思ってたのに……父さんも母さんも、新名家の恥だって言って。あたしのお兄ちゃんや妹が結婚するときに、障害になるからって。自分のセクシャリティに不満なんて無いけど、今でもあの日のこと、思い出しては後悔するの。言わなきゃよかった、黙ってればよかった。黙ったまま、親の理想の良い娘でいたなら……どうなってたんだろうって」

葉瑠、言葉が出ない。

安芸「僕の話も聞いてくれますか？　僕は、ニーナさんとは逆なんです。ずっとずっと……親に言えないままなんです。僕もう三十なので……時々実家に帰ると、お見合いなんか勧められたりして。一人っ子だから

余計に。嫁さんはどんな人がいいだとか、孫の顔が見たいだとか。僕、その全部に、笑って頷くしかないんです。今さらどうしようもない。僕がもっと早くにカミングアウトしてたなら、両親も、僕の弟や妹を、もうける気になったかもしれないのに。……何をしたいの、と、さっき葉瑠くんは聞きましたね？　僕たちは、君に知ってほしいんです、僕たちがどういう人間か。そしていつか、君の本当を教えてほしいんです」

樹「家族になりたいの」

安芸「本当の家族になりたいんです……葉瑠くん、君と」

葉瑠、目を伏せて答えない。

○百々海家・二階・葉瑠の部屋（夜）

携帯を手にしている葉瑠。

拓真とのトーク画面。

『今何してる？』というメッセージをどうしても送信できない。

○都立西南高校・三階・２年Ａ組教室内（昼）

曇り空。
チャイムが鳴り、昼休みへ。
葉瑠、風花と中名生がじっと見てくるのに気づき、顔を上げ、愛想笑い。
○同・屋上（昼）
屋上を移動する三人。
風花「よかった、誰もいない」
中名生「ったりめぇだよ、このクソさびぃ。馬鹿じゃねーの」
風花「じゃ戻れば？　あたし百々海くんと二人で食べるから」
葉瑠、苦笑い。
○同・屋上・時間経過後（昼）
三人とも無言で食べ続けている。
中名生「（痺れを切らし）あーっもう、むずむずする！　おいハル、なんか喋れ！」
風花「うっさいツバサ！　黙ってろ！」
中名生「じゃお前でもいいからなんか言えよ。オレこーゆー待ちの姿勢？　駄目なんだって」

風花「うっさいうっさい、はい終了ー」

風花、中名生の口に鈴カステラを押し込む。

葉瑠、呆気にとられ、

葉瑠「あ……なんか、ごめんね？　ツバサも帯刀さんも……なんかすごい、気を使ってくれて」

風花「当たり前じゃん、友達だもん！」

葉瑠「もう西南祭は終わったのに？」

風花「……（苦笑して）友達だよ？　そういうの聞くとこ、百々海くんらしいね」

葉瑠「……ごめん」

風花「ううん。変に繕ってるよりいい。あたし正直言うとね、初めて一緒に帰った日、あの第一回目の委員会の日、あの時の百々海くん、苦手だった。ずっと緊張してあたしの顔色窺って、会話が切れないようにしながら、でも話してるのはどうでもいいことばっか。自分自身のことにもあたしのことにも深く触れようとしない。あたしが水

越くんのこと聞いたら、すごく嫌そうで」

葉瑠「いやそんなこと……」

×　×　×

（フラッシュ）

風花「水越くんと百々海くんて、どーゆー関係？」

×　×　×

葉瑠「……あったかも」

風花「でしょ？　しかもあの後すぐ、百々海くんは本屋に入ってっちゃうし。同じ実行委員として仲良くなろうとしてたあたしの努力……！」

葉瑠「ごめん」

風花「ううん、まぁそれはいいの、今思えば私にも反省点があるし。でもね、これだけは言いたい。緊張して気を使って、心にも無いことぺらぺら喋るくらいなら……葉瑠くんは、葉瑠くんらしくいて？　今みたいに、ちょっとそっけないくらいでいいから」

中名生「（カステラをようやく飲み込み）それ

オレもそう思う！　無理しねぇでそのままでいろよ。ハルはさ、単なる陰キャラじゃねぇもん。勉強できるし、実行委員としてまとめる力もあるし、メイド服だって全然着るじゃん？　まぁ健全な男子高校生として、彼女がいないのはアレだけど」

風花「アンタだっていないじゃん」

中名生「まーまー、オレのことは今置いといて。なんつーかなぁ……ハルは、独特の世界観っていうか、ブレない自分っていうか……そーゆーの持ってるよ。だからオレ、ハルとダチになりたいって思ったんだ。はい、以上！　恥ずかし！　締めどうぞ！」

風花「なに！　丸投げ？」

風花と中名生、神妙な表情になり、

風花「……あのね、つまり……あたしたち……友達だからね……それは忘れないで」

葉瑠、二人を見、何か言おうとするも、

その時、ピカッと空が光る。

そして轟く雷鳴、降り出す雨。

慌てて屋内へ入る三人。
びしょ濡れで、風花と中名生はそれまでの話どころじゃなくなっている。
一人、考え続けている葉瑠。
○都立西南高校・三階・２年Ｂ組教室内（昼）
クラスメイトと昼食をとっていた拓真、雨に気づき、窓の外を見る。
じっと見つめ続ける。
○住宅街（夜）
枯れ木になっている街路樹。
歩きながら携帯を見る葉瑠。
まだ拓真へのメッセージは送れない。
後ろから康一が駆けてきて声を掛ける。
葉瑠、携帯を仕舞い、康一と会話する。
○百々海家・ＬＤＫ（夜）
五人の食卓。
他の四人が会話する中、一人黙々と食べ続ける葉瑠。
真由美「あ……」
真由美、葉瑠がふろふき大根に肉みそ

を掛けずに食べるのを目撃。
葉瑠、咀嚼しつつ、真由美に気づき、視線を上げる。
真由美「味無いでしょ？　それ、おでんじゃなくてふろふきなの」
真由美、器に作ってある肉みそをスプーンで掬い、葉瑠の食べかけの大根へ。
葉瑠「気づかなかったです。ありがとうございます……」
真由美「……（意を決して）ねぇ葉瑠……最近、何か悩んでるんじゃない？」
葉瑠「いいえ、何も」
真由美「そう……？　最近、ぼうっとしてることが多いから……」
葉瑠「夜中まで勉強してるせいで眠いんです。それだけですよ」
真由美「本当に？」
葉瑠「本当です」
真由美「……私たちには言えないこと？」
葉瑠「だから、何も無いんですって」

真由美「進路のこと？」

葉瑠「母さん」

真由美「拓真くんのこと？」

葉瑠「関係ありません！」

バン、と机に箸を叩きつけて立ち上がる葉瑠。

葉瑠「……なんなんですか、みんなして」

×　×　×

（フラッシュ）

帰り道にて、葉瑠を案じる康一。

葉瑠の声「今さら」

（フラッシュ）

ファミレスにて葉瑠を案じる樹と安芸。

葉瑠の声「寄ってたかって悩みだなんだ」

（フラッシュ）

屋上にて葉瑠を案じる中名生と風花。

葉瑠の声「そんなの……」

×　×　×

葉瑠「ありすぎるんだよ！　無いわけないだろ。父さんも母さんも、ずっと仮面夫婦だ

ったくせに。アキさんとニーナだって、突然転がり込んできたくせに。ゲイだとかレズだとか……子どもが欲しくて結婚しただとか……タクだって……なんでっ？　ずっと親友だったのにっ……！　……何もかもっ、全部、全部……ぜんぶっ……言えないから悩んでんだよ……！」

葉瑠、ＬＤＫを出ていこうとする。

が、安芸と樹が立ち塞がる。

葉瑠「退いてくれる？」

首を横に振る安芸と樹。

葉瑠、本当は思っていないが、

葉瑠「退けよ変態！　キモイんだよ。アンタらと家族だなんて……反吐が出る」

と言い、涙をぽろりと零す。

安芸と樹、涙ぐみつつも退かない。

康一「葉瑠、ごめんな。ほんとにごめんな」

真由美「ごめんなさい葉瑠……私、あなたが心配で……拓真くんに探りを入れた。あなたの部屋も探った。それでわかった」

葉瑠「最低だね母さん。改めて嫌いになった」

真由美「嫌いでもいい。〝私は〟葉瑠を愛してるもの。……葉瑠あなた、道大を目指すって言ってるけど、本当は拓真くんと同じ、早生葉大学に行きたい、そうでしょ？」

葉瑠、真由美を振り向き、

葉瑠「うん。でも目指してるのは道大だよ。受かれば北海道に行ける。この家から出ていける。僕と父さんと母さんと……息の詰まるこの家を……ずっと、捨てたくて……」

真由美「ならどうして私立の大学の参考書なんか持ってるの。音楽の雑誌も、ＣＤも」

葉瑠「それは……迷ってたから。今も、迷ってるから」

葉瑠、樹と安芸を振り向き、

葉瑠「ごめんなさい、アキさん、ニーナ。キモイだなんて思ってない。僕……二人がこの家に来てから――家族が五人になってからね、思い出せるようになったんだ。母さんと父さんと、小さい頃、楽しかったこと。

幸せだったこと。……朝起きて、おはようって言うとき、帰ってきて、ただいまって言うとき……胸が詰まってしょうがなかった……！」

康一「葉瑠。だったら行くな。北海道なんて行くな。お前を愛してる。近くにいてほしい。できるだけ長く」

真由美「母さんだってそう！　一緒にいたい」

安芸「僕もです、葉瑠くん」

樹「あたしも、あんたのことちょっと……自分の子どもみたいに、思っちゃってたとこで……」

康一「行くな、葉瑠」

安芸「葉瑠くん」

樹「葉瑠」

真由美「葉瑠」

皆が葉瑠を見つめている。

葉瑠、静かに涙を流す。

葉瑠M「百々海家に生まれたこと……僕はこの先、後悔せずに生きていけるだろうか。

その答えは、まだわからないけど……」

○葉瑠の携帯（夜）

拓真へメッセージが送信されている。

『明日の朝、待ってるから』

○百々海家・二階・葉瑠の部屋（朝）

携帯のアラームが鳴り、起き出す葉瑠。

本棚には勉強関連に加え、音楽雑誌。

勉強机の端には洋楽ロックのＣＤ。

○同・ＬＤＫ（朝）

ダイニングには五人分の朝食。

キッチンカウンターには家族写真。

安芸と樹のスナップ写真の切り抜きが、

写真立ての枠に貼りつけられている。

真由美、キッチンで片づけをしている。

葉瑠、入ってきて、

葉瑠「おはようございい……おはよう、母さん」

真由美「おはよう、葉瑠。みんないつ来るか

わからないから先食べちゃって」

葉瑠「うん、いただきます」

葉瑠、座って食べ始める。

続いて安芸が、遅れて康一が入って来、
四人で会話しつつ食事が進む。
玄関の開く音。
真由美「あ、帰ってきた」
仕事帰りで眠たげな樹が入ってくる。
樹「ただいまぁ……あらみんな揃ってぇ」
真由美「そこの、樹の分ね」
樹「え、ほんとー？　じゃあ食べるー」
と、席に着き食べ始める。
最後に真由美が席に着く。
真由美「いただきまーす」
和やかに食事する一人ひとりの表情。
葉瑠、手を合わせて、
葉瑠「ごちそうさまでした」
席を立ち、空の皿を流し台へ。
弁当を持ち、
葉瑠「いってきます」
皆めいめいに「いってらっしゃい」
○百々海家前（朝）
拓真を待っている葉瑠。

水越家玄関の開く音、そして足音。
門を開け、拓真が出てくる。
葉瑠「タク……」
拓真、振り向き、目が合う二人。
葉瑠「おはよう」
拓真「……おはよう……ハル」
葉瑠、拓真に歩み寄り、向き合う二人。
葉瑠「タクに、言わなきゃいけないことがあるんだ。僕、志望校変える」
拓真「え？」
葉瑠「早生葉を目指す。それで受かったら、バンドサークルに入る。音楽が好きなんだ。ほんとはずっと前から……ずっと」
拓真「親には？　言ったのか……」
葉瑠「うん。応援してくれるって」
拓真「そ……よかったな」
葉瑠「僕、今の家族となら、上手くやっていけそうなんだ。安心して僕が僕らしくいられる場所が……やっと見つかりそうなんだ」
拓真「よかったじゃんか……よかったよ」

葉瑠「タク。そこにはタクも必要なんだ」

拓真、困ったように顔を背け、

拓真「やめたほうがいいよ。オレ、よくわかんないんだ。自分のことも、お前のことも。だから、いつか……葉瑠のこと、すげぇ傷つけるかもしんない。怖いんだよそれが。お前と会えなくなることより、ずっと」

葉瑠「うん。僕も怖い。いつか、タクを傷つけるかもしれないこと。でも、そんないつかは来ないかもしれない。来ても、またやり直せるかもしれない。それよりも、僕は……今、タクと会えなくなることの方が怖い。大切なんだ、タクのこと。必要なんだ。大好きなんだ。……それじゃあ、駄目？」

拓真、涙を堪え、葉瑠に抱きつく。

拓真「なんだよそれ。ばか。ばぁーか！」

葉瑠、拓真の背に腕を回し、

葉瑠「ありがとタク……ありがと……！」

百々海家玄関が開く音。

葉瑠と拓真、慌てて離れる。

玄関から安芸と康一が出てくる。
二人は門を出たところで葉瑠らを見つけ、
康一「おはよう、拓真くん」
安芸「おはようございます」
拓真「あっ、おはようございます！」
康一と安芸、意味深に微笑み、駅の方へ歩いていく。
続いて、真由美、樹が出てきて、
真由美「あら、おはよう拓真くん。（康一らへ）いってらっしゃーい！」
樹「（欠伸をしつつ）おはよー。ねぇアンタら時間大丈夫？」
葉瑠「あ、そっか、やばいかも！　行こうタク。行ってきまーす！」
走り出す葉瑠。
拓真「えっ、ちょ、待てよ！　ハル！」
追いかける拓真。
見送る真由美と樹、微笑んで寄り添う。
○住宅街（朝）

康一と安芸が並んで歩いている。
その後ろから二人を追い抜いていく葉瑠と拓真。
くすくすと笑う康一と安芸。
枯れ木となった街路樹が陽光に輝いている。

葉瑠M「春はまだ遠い」

○都立西南高校・外観（朝）

葉瑠M「だけど、僕は今……」

○同・三階・2年A組教室内（朝）

風花と中名生、それぞれの友人たちと談笑している。
戸口に現れる葉瑠と拓真。
それを見つけ、駆け寄ってくる風花と中名生。

葉瑠M「あたたかい、春の訪れを感じている」

談笑する四人。
満面の笑みを浮かべる葉瑠。

完